“もしもノート”作成講座　第4回

ゆずりはの会　竹内一良　　35-7182

時　：　6/8（火）午後 7 時～9 時
場所：　福祉センター　22 研修室
参加者：　16 名

1．　葬儀・墓

竹内一良さん　　A4で 16 枚の資料、雑誌からの切り抜き

蒲郡市に生まれ育った本人が、豊田市に移り住んで多くの年月が流れた。父と母の面倒見、仏壇、墓など姉の一人が面倒を見てくれていた。最近、蒲郡市から、仏壇を豊田市の自分のところへ移した。墓を移そうとしたら、面倒を見てくれていた姉の反対にあって、中断している。時を同じくして、「もしもノート」の作成などで勉強をしてきた。あらためて、葬儀とは何か、墓の意味は何かを考える機会に恵まれた。世間では、色々な動きが進んでいる。こうした話を話し会うことが出来る仲間を持つことの大切さを実感し、有難いことだと思っている。

2．医療について

安斎　久美さん　　A3で 4 枚の資料

母親を介護した経験から、いくつかのテーマに関心を寄せている。そうした中で出合った 2 冊の本を紹介した。

「夫が認知症になった」　　ライフサポート社。

山口喜美子著　（看護学校教員、認知症の人と家族の会　千葉県支部世話人）

認知症の原因解明と治療法の開発は、少しずつ進んでいる。
認知症をそれと判断できるように、医師の研修も進んでいる。
認知症を理解できる人が多くなるほど、救われる高齢者は多くなる。
最愛の人が認知症になった時に、地域の人に話して理解と協力を得ることが自分にできるだろうか。部屋に閉じ込めておく、遠くの施設に送ってしまいたくなるのではないのか、との問いは重い。

「平穏死」のすすめ　　講談社

石飛幸三　（特別養護老人ホーム　芦花ホーム　医師）

口から食べられなくなった人に対して 「胃ろう」で栄養を補給する方法が急速に普及した。しかし本人の QOL（生活の質） を高めているだろうか。
胃ろうにすると誤嚥性肺炎の心配がなくなるとの見解は間違いであり、食道における逆流防止機能の衰えにより、肺炎は起こり得る。
終の棲家と思ったホームで死ねない高齢者が多い現在の状況は何かが間違っている。
胃ろうの技術的な改良などの研究だけでなく、死に望む人間にとって、医療は（例えば胃ろう）、どう関わるのか真剣に考えようではないか。

4. 本格的な福祉講座の開設

本多 豊治

自分の周りにいる高齢者の不安が大きい。支援の手が差し伸べられていない、などから高齢者専用賃貸住宅を建設しようとしたが、役所の担当者の変更などが障がいとなって実現していない。

地域包括支援センターも、地域に入り込んでくるほどの力はない。遠回りのようだが、人材の教育・育成が必要である。そこで高齢者を対象に、福祉全般について、基礎的だが、しっかりしたカリキュラで教える学校を作りたい。

年寄りのグループで考えていることなので、実行力が弱い。どなたか一緒にやってくれる人は居ませんか？

5. 医療グループから

豊田厚生病院の西村先生に講演をお願いしたが、7月には、学会で研究発表の予定があり忙しい。又、延命治療、尊厳死、臓器移植など専門外のテーマもお願いしたので、躊躇され、次回7月の集まりでは講演されない。いつか先生のご専門の分野のテーマでお話いただく機会を作りたい。

岡崎市には、「ホスピス研究会 OKAZAKI」のように、患者、医師、市民グループが集まって話し合う会があり、豊田市にもあると良いな、と言われています。 一度 岡崎の会を訪ねて、色々お聞きしてくる予定である。

6. 次回の予定

第 5 回 7/13（火）医療・闘病、まとめ、 ノートの完成

開催時間： 午後 7 時～8 時半

開催場所： 豊田市福祉センター 第 22 研修室

＜注記＞

上記内容にミスなどあったら、ご指摘ください。